

東京2020オリンピック聖火リレー愛知県実行委員会選定の聖火ランナー

走行日:2020年4月6日(月)

聖火ランナー数:21人

※五十音順(敬称略)、走行日時点の満年齢

	<p>赤川 三好(あかがわ みつよし)</p>	<p>69歳</p>	<p>刈谷市在住</p>
<p>私は、視覚障がい者のガイドボランティアを20年以上続け、マラソンガイドも行った。伴走の相手が、視覚、聴覚障害だったため、独学でガイド方法を決め、名古屋市の障がい者スポーツ大会や各地の大会に数多く出場した。 5年前には、歩いて走っても、いつ来ていつ帰っても良いランナーズクラブを立ち上げた。ゆるい趣旨は賛同され、設立時の6人が40数人に。4年前からは、市民を対象にした3時間チャリティジョグ&ウォークも開催。参加は無料。趣旨は会と同様とし、参加者が健康になっていただくことが目標。同時に、国内の震災復興等への寄付を目的に募金をお願いし、市民の心の健康づくりにも寄与している。 5年前、民生委員を拝命。同時に地域の安全パトロール隊班長も兼務。高齢者の見守りと安全巡回を兼ねた自主ランを実施している。 皆様と健康づくりに頑張ってきた私が、今度は主役で聖火と伴に走りたい。そして、その姿で、今度は皆さまに夢と希望を与えたい。</p>			
 <p>写真提供：名古屋大学</p>	<p>天野 浩(あまの ひろし)</p>	<p>59歳</p>	<p>名古屋市在住</p>
<p>私は、自らの研究を通じて人の役に立つことを目標とし、人々に貢献することを大切にしてきました。 元旦を除く364日、実験室に閉じこもって研究を続けました。実験は1500回以上にも上りましたが、絶対にあきらめませんでした。このように成功を信じ努力を続けることができたのも、恩師の赤崎勇名古屋大学特別教授の励ましがあったからです。 私は科学者ですが、私の青色発光ダイオード発明への成功への過程は、スポーツにも通じるものがあると思います。今回、日々の研究の積み重ねが、オリンピック・パラリンピックに携わる機会に結び付いたので、何事にもあきらめず努力してほしいことを、また努力をしている人へあたたかなサポートをしてほしいことを、この聖火リレーを通じて、社会そして人々に伝えたいと思っています。</p>			
	<p>石田 莉子(いしだりこ)</p>	<p>13歳</p>	<p>一宮市在住</p>
<p>私は今、陸上をやっています。 市大会、西尾張大会、県大会、東海大会と色々な大会で多くのことを学び、勝つ喜び、負ける悔しさを経験していく中で、オリンピックに出場したいと夢を抱くようになりました。夢に向かって走ることは1人ではできません。お父さん、お母さんや指導してくださるコーチ、そしていつも頑張ると言ってくれる兄姉や祖父母が私を応援して支えてくれています。 いつか日本代表になり、日本の女子として世界で活躍できるようになりたいです。努力することを諦めなければ、夢は叶うと信じています。 聖火ランナーになり、走ることの楽しさと、応援してくれるみんなに感謝を伝えたいと思います。</p>			
	<p>板谷 勝彦(いたや かつひこ)</p>	<p>59歳</p>	<p>南知多町在住</p>
<p>現在私は愛知県南知多町の篠島で海上タクシー業を営んでおります。篠島は名古屋より約1時間半。南知多の自然に囲まれた風光明媚な離島です。ふぐ、しらす、鯛、鰻を始めとした、海の幸グルメと観光を存分に楽しめる島です。仕事柄、たくさんの方々と出会い、絆が生まれたりとお客様には常々感謝しております。このような状況の中、私は島の発展の為に南知多町消防団副団長として、島民の方々が安心して暮らせるよう、また、島外からのお客様が安心して観光できるように努めています。また、観光協会理事として島の魅力を発信し、活気あふれる島になるよう努力しています。 しかし、全盛期より観光客は激減し、島の観光はかつてないほどの窮地に追い込まれています。今の篠島に必要なのは島民一人ひとりが篠島を盛り上げたいという想いを持ち、それをまとめ、島民が一丸となって走る事だと考えています。 もし当選し、聖火ランナーとして走ることができれば島民の代表として地域の一体感を高め、活気ある島づくりに貢献出来ると確信しています。</p>			

	大橋 雅典(おおはし まさのり)	30歳	犬山市在住
<p>私は、犬山市を拠点に活動する鳴子踊りチーム笑^ん（じょう）の代表をしています。犬山市を中心に近隣市町村から集まる約100名のメンバーと共に犬山の魅力を踊りで表現し2020年にはチーム結成20年を迎えます。</p> <p>主な活動は毎年8月末に開催されるにっぽんど真ん中祭り（以下どまつり）を中心に過去どまつり大賞5回、準どまつり大賞10回受賞しています。第17回のどまつり大賞は内閣総理大臣賞を合わせて受賞させていただきました。</p> <p>地元犬山はもちろん愛知県、日本国内でも活動の場を広げ近年では台湾でも日本の文化として踊りを披露させていただいています。踊りで町を表現することで地元の事を知り、犬山の人たちと繋がることができました。今では春の犬山祭の担ぎ手“てこ”としても関わらせていただいています。</p> <p>聖火ランナーのコースの中に犬山市があることを知り是非とも参加したいと思い応募致しました。</p>			
	織田 英嗣(おだ えいじ)	56歳	東郷町在住
<p>2006年42歳の時、食道がんに罹患、15時間に及ぶ手術をし2日間人工呼吸器につなわれ孤独、無力感、絶望を経験。</p> <p>さらに5年生存率20%の宣告を受けるものの生き方を180度変えたことで、今は「がんになった良かった!」と思えるまでになる。</p> <p>その後、以前の自分と同じように苦しむ、がん患者さんをサポートしたいとの思いで、「ガンになっても明るく、楽しく、幸せに!」をスローガンにガン経験者の会めぐみの会を立ち上げる。</p> <p>現在、歌のグループめぐみ音をはじめ、和太鼓、フラダンスなどのグループを作り病院などでのコンサート活動や、身体に優しい食品を使ったカフェの営業、名古屋シティマラソンにも毎年数名がエントリーと病に向かうのではなく、ガンになっても楽しく生きることが出来る場を提供し、テレビや新聞で頻繁に取り上げられています。</p> <p>聖火ランナーになることで、ガンになっても人生を楽しく生き抜けるような希望の光を灯したく応募しました。</p>			
	久世 義晃(くせ よしあき)	35歳	名古屋市在住
<p>2011年発生した東日本大震災。震災後NPO団体を立ち上げ被災地へ200回以上足を運び被災者の支援をしてきました。そこで知り合った被災者の方々。「オリンピックが楽しみだ。東京開催だから見たい。復興も一緒に進むといいな。日本勢のメダルに期待だ」など、何度も笑顔で話をしてくれました。</p> <p>しかし、何名かの方々には東京オリンピックを見る事無くお亡くなりになりました。残念でなりません。被災者の皆様から私達に震災の経験の後に話してくれた願いは「地震・津波がきても生きて。大切な方と・地域の方と協力して生き抜いて」ということでした。</p> <p>私はここ愛知に住んでいる以上、東海・東南海地震は必ず起きると思っています。だからこそ、地震を風化することなく、被災者の願い・経験を無駄にする事無く、愛知でも生かしていきたい。私が聖火ランナーとして走る事により、伝えていきたい・挑戦したいと思い応募いたします。宜しくお願い致します。</p>			
	ジェイムス・ヘイブンス	49歳	名古屋市在住
<p>地元タレントとして東海地区において26年間、市民の皆様に支えられながら様々な活動を通して地域発展のため尽力して参りました。</p> <p>1997年ナゴヤドームイメージソングや日本臓器移植ネットワークの応援ソングを作詞作曲。</p> <p>1997年～日本赤十字社 1日所長に任命（名古屋市内 3度）</p> <p>1998年～1日警察署長に任命される、後愛知県内10回以上任命頂いています</p> <p>2004年ににっぽんど真ん中祭り“音賞”受賞曲「NAGOYA REGGAE」作詞作曲</p> <p>2007年長久手立て籠もり事件の人質脱出に尽力した</p> <p>2018年スペシャルオリンピックス愛知県大会の応援団長に任命される</p> <p>2019年日本アレルギー学会の応援ソングを作詞作曲</p> <p>名古屋市内の全ての児童養護施設にクリスマス・プレゼントを毎年届け、在日米国商工会議所主催のウォーカーソンや、東山動植物園、ヒルトンXMAS TRAINのスポンサーをも長年つづけ、毎年寄付を行っております。今後も地域発展のため尽力させていただく所存ですので宜くお願い申し上げます。</p>			

	田村 淳(たむら あつし)	46歳	犬山観光特使
	名鶴 ひとみ(なづる ひとみ)	70歳	名古屋市在住
	榎崎 正剛(ならざき せいごう)	44歳	名古屋市在住
	野村 美結(のむら みゆ)	13歳	春日井市在住

東京2020オリンピックが開催される2020年は、犬山観光特使に就任してからちょうど10年の節目にあたります。“犬山城は全国の城郭の中で最も好きな城”、“犬山を盛り上げよう”、“犬山城を日本一、お客が来る城にしたい”という想いから活動を続けて10年がたちます。

56年ぶりに開催される東京オリンピックの聖火リレーに聖火ランナーとして参加することは、犬山城とオリンピックのどちらも盛り上げることのできる絶好の機会です。

聖火ランナーとして参加し、犬山市の聖火リレーがいろいろなところで発信されることで、大きな城ではなくてもオーラを感じる『国宝 犬山城』の魅力を、全国・海外の多くの人に伝えたいと思います。

名古屋鶴舞生まれであることから「名鶴ひとみ」を芸名とし、1970年に宝塚歌劇団に入団。1982年にダンススタジオを設立。世界デザイン博や中区100年祭、障がい者と市民の集いなどの振付・演出に携わり、「夢を持つものが安心して打ち込める環境作り」

「どんな困難にも共に立ち向かう粘り強さ」をモットーに指導を続け、数々のエンターテインメント集団へ卒業生を輩出。定期公演を開催し、名古屋市民芸術祭では2009年、2017年に特別賞を受賞。地域の文化・芸術の発展に努めてまいりました。

今まで指導してきた1万人近くの生徒の中には、摂食障害・うつなどの精神的な問題を抱える子もいました。葛藤する生徒たちの症状を、ダンスが和らげたりそうでなかったりすることを知りとても悩みました。

夢を実現できる子は一握りですが、五輪選手達が戦う姿や消えることのない聖火の光が、人々に希望の道を照らしていくでしょう。私もその一員になることを願い、聖火ランナーに応募します。

名古屋グランパスでの20年間、プロサッカー選手として私は多くの方々に支えられてきました。パロマ瑞穂スタジアムでの大声援はいつ、どんなときも私を後押ししてくれ、名古屋の街とともに過ごした現役生活は何物にも代えがたい素晴らしい時間でした。

引退後、名古屋グランパスのクラブスペシャルフェローとして、次世代のゴールキーパー育成のために育成チームの指導に携わるとともに、地域のイベントに参加する中で多くの子もたちと接する機会がありました。未来ある子どもたちは大きな可能性に満ちています。東京2020オリンピックは彼らにとって大きな希望となり、胸に深く刻まれる大会になることでしょう。

日本の子どもたちにとって東京2020オリンピックが夢や希望をいなく大きなきっかけとなり、子どもたちの成長がレガシーとなることを祈念するとともに、名古屋の皆様への感謝の気持ちをこめて聖火ランナーとして走りきりたいと思います。


私が聖火ランナーをやろうと思ったきっかけは、日本で行われるオリンピックで聖火ランナーという経験が出来ることはめったにないし、誰もがやりたいと思っても出来ないことだと思ったからです。もう1つは、自分がかんばって走ることでたくさんの人に勇気と元気を与えられたらいいなと考えたからです。

私は陸上のクラブチームに所属していて、800mをやっています。練習や大会でつらく大変な時に、チームの仲間が応援してくれるおかげで、かんばろう、やりきろうという気持ちになれるので、私も少しでも多くの人に勇気と元気を与えられればいいなと思いました。

このように私が聖火ランナーをやると決めた以上は、最後まであきらめず、しっかりと走りきりたいです。本番当日、たくさん緊張してしまうかもしれないですが、最後まで自分の役割りを務めて、楽しく走りたいです。

	廣瀬 誠(ひろせ まこと)	43歳	名古屋市在住
<p>聖火ランナーとして走れるかもしれないと想像するだけで、ワクワクした気持ちでいっぱいです。日本で開催される二度目のオリンピック・パラリンピックは競技力が向上し、徐々に認知度も高まってきていると感じていますが、もっと多くの方に関わっていただきたいと考えています。パラリンピック経験者として東京2020には「選手には最善を、観戦者には感動を、社会には障害者理解を」という思いを持っています。</p> <p>私自身、柔道と出会い「勢力善用・自他共栄」の精神に触れ、視覚障害者柔道でパラリンピックを目指す中で「障害は不便だけど不幸ではない」と思うようになりました。そして支えてくれる周囲の方々とともにスポーツを窓口にした障害者理解が勧められたと思っており、現在も、その強い思いを持って、視覚障害者柔道の指導者として後進の育成に励んでいます。2020で終わりではなく、ここを共生社会の実現のきっかけにしたい。そんな思いをのせて走りたいと思います。</p>			
	藤井 聡太(ふじい そうた)	17歳	瀬戸市在住
<p>今回、東京2020オリンピックの聖火リレーコースに瀬戸市が選ばれ、愛知県コースの出発地となる事につきましてとても喜ばしく思っております。</p> <p>瀬戸市で暮らしながらプロ棋士として対局を重ねる私にとって、地元の方々のご声援、ご支援はありがたく、大きな力となっております。</p> <p>今回、いつも応援してくださる地元の皆さまに笑顔が届けられるよう、聖火ランナーの一員として自分らしく精一杯走りたいと思っております。</p> <p>どうぞよろしくお願い致します。</p>			
	牧 心春(まき こはる)	14歳	清須市在住
<p>「スポーツは、人と人を結び、人生を豊かにする」私はそう思います。私は、5歳からバスケットボールをしています。始めは習い事感覚で始めました。でも今では、私の生活になくはならない存在となりました。今までバスケットボールをしてきて、もちろん楽しいことばかりではなく、むしろ、悩んだり苦しんだりしたことのほうが多いかもしれません。そんな時は、一人ではなく、バスケを通じて出会った仲間、コーチ、何よりも家族の支えで立ち上がりがんばってこれました。部活ではキャプテンを務めています。みんなで話し合い、時にはぶつかり合いながら日々活動し、クラブチームではいろいろな中学校から来た仲間達と切磋琢磨しながら活動しています。</p> <p>このように、バスケを通じて多くの人に出会い、刺激を受け、いろいろな景色を見ることができました。今まで出会った人々への感謝をこめて、元気に堂々と走り、皆さんに元気と勇気を与えられたらと思います。</p>			
	三浦 伊織(みうら いおり)	27歳	一宮市出身
<p>私、三浦伊織は、一宮市北方町生まれの女子プロ野球選手です。女子プロ野球リーグ発足以来、京都フローラに所属し今年で入団10年目となります。野球との出会いは小学校時代。北方町少年野球クラブの1人目の女子選手としてプレーしました。北方中学校ではソフトボール部主将として市大会優勝、椋山女学園高等学校ではテニス部主将としてインターハイ・団体の部でベスト4の成績を収めました。プロ野球選手になった後は、女子野球の全日本代表としてワールドカップ6連覇を達成しました。</p> <p>私の人生は、スポーツ無くては語れません。振り返ると、競技種目が変わっても、そこにはたくさんの人達との交流がありました。スポーツに携わることで得たこの体験が私を大きく成長させてくれたと思います。そして何より、スポーツ選手として今でも活躍することができるのは、多くの方々の支えと応援があるからです。今回、オリンピックの聖火ランナーとして今までお世話になってきた方々に自分の走っている姿を見せ、感謝の気持ちを伝え、少しでも恩返しできればと考えています。</p>			

	武藤 空哉(むとう くうや)	15歳	名古屋市在住
	<p>僕は3歳の時におたふくかぜで左耳が聞こえなくなりました。学校でざわざわしていると人の話が聞き取れず大変な事もありました。それでも中学の入学式で、新入生代表で誓いの言葉を大きな声で言えた事で、みんなからの支えもあって中学では副会長をやっています。人に助けられ、弱い立場の人の気持ちにも寄り添えるように心がけています。</p> <p>そして僕の将来の夢は、本当は自衛隊に入り人の助けになりたいと思っていました。でも片耳が聞こえないと入ることが出来ません。</p> <p>片耳での僕ですが音楽という夢もあります。4年ほど前に出来た東海市子どものオーケストラに入ってコンサートマスターにもなり、合宿では気持ちを合わせて曲を作りあげていく事を学びました。東海市芸術劇場のホームページに僕の映像もあります。中学では毎年合唱コンクールで指揮をしたり、吹奏楽部ではトランペットでマーチングも頑張っています。片耳でもいろんな事に挑戦しているので、そんな姿をいろんな人に知ってもらう為に、見てもらう為に、聖火ランナーになって走りたいです。</p>		
	森田 泰人(もりた やすと)	58歳	春日井市在住
	<p>私は、現在、犬山城にて英語ガイドのボランティアをしています。子供の頃から日本の歴史、お城が好きで、これらを英語で紹介する事に興味があり、5年程前から、このボランティア団体のメンバーの一員として活動しています。</p> <p>平日は、働いていますので、専ら週末の土日のどちらかにお城で待機、ガイド要請があれば外国人観光客を英語でガイドしています。犬山城は現存十二天守の一つで一番古く、日本の国宝でもあります。天守閣の最上階を取りまく回廊からは、城下町、木曾川、遠くは信州の山々を見渡すことができ、これは他の国宝の城でも味わう事はできません。</p> <p>また、このお城は、愛知県が生んだ戦国末の三英傑、信長、秀吉、家康にも縁があり、これらを外国の方にアピールしています。今回、聖火ランナーに申込みしたのは、日本最古の城である犬山城を世界にアピールし、日本の歴史、文化、伝統を世界に発信したいと考えたからです。これがきっかけで、より多くの外国の方が犬山城を訪れ、日本をより好きになって頂ければと思っています。</p>		
	安田 凌(やすだ りょう)	13歳	春日井市在住
	<p>僕が陸上に出会ったきっかけは、サッカーが上手くいっていなかった時に始めた毎朝のランニングでした。そのおかげもあってか、愛知駅伝に出場する機会をいただくことができ、そこでたくさんの人の温かみとスポーツができることへの感謝を学びました。このようなスポーツでのつながりが今の僕の成長につながっていると感じています。</p> <p>愛知駅伝でつないだ襷は、ここまでつないできた仲間の気持ちがこもっていました。きっとトーチにも同じようなものがこもっていると思います。たくさんの人の気持ちがこもったトーチを受けとり、それを未来につなげる事が出来るように、トーチにこもっている気持ちを少しでも多く感じながら楽しく走ることが出来ればいいと思います。</p>		
	山田 外美代(やまだ とみよ)	70歳	瀬戸市在住
	<p>過去5回の手術を経験し、元気のない時期もあったが、愛知万博会期185日間毎日入場を経て見事に健康を取り戻す。恩返しもかね、愛知万博の環境理念をその後の万博やイベント、講演会などで積極的に発信。第32回全国都市緑化あいちフェアでは、大村秀章愛知県知事からPRサポーター第1号に認定され、フェア応援事業やテープカット、延べ199名へのボランティアガイドに参加して理念の継承に努め、秋篠宮同妃両殿下（当時）からもお声がけをいただいた。閉幕後、フェアを盛り上げたとの理由で知事から感謝状も贈呈された。</p> <p>年を重ねてもなお、前向きに歩む姿は、シルバー世代はもちろん、世代を越えて支持していただけると考える。続けること、希望を持って生きることが人を元気にする。瀬戸市万博交流大使として私の故郷・瀬戸市を走って聖火リレーを盛り上げたい。</p> <p>また、この経験を「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとした2025年の大阪・関西万博へとつなげたい。</p>		

	和田 真人(わだ まさと)	51歳	春日井市在住
<p>病棟で過ごす子どもたちに、聖火ランナーとして走る姿を見せたい！ 「走ることが誰かのためになる」チャリティランニングのイベント企画、「人生が変わるランニングコーチ」として春日井市を中心に活動。 毎年クリスマスには病棟で頑張る子どもたちにマラソン完走メダルをプレゼントしています。 マラソンの苦しさや乗り越えたときの達成感、そして私が行った砂漠や世界のマラソンの映像や話をしながら想像力を膨らまし、夢を広げます。 その子どもたちに、オリンピックという夢も見させてあげたい！ 世界一過酷な自動車レース「パリ～ダカールラリー」のリタイヤから15年。 今度は自分の足で世界一過酷な「サハラマラソン」完走。 一般財団法人ランフォーピース協会ランニングコーチ 名古屋ウィメンズマラソン完走プロジェクト 春日井絆マラソン大会委員長 東海自然歩道トレイルマラニック実行委員長、など。</p>			

※「顔写真」「年齢」「市町村とのゆかり(〇〇市在住等)」「自己PR・応募動機」については、ご本人からご了解をいただいた情報のみ掲載しています。

東京2020オリンピック聖火リレー愛知県実行委員会選定の聖火ランナー

走行日:2020年4月7日(火)

聖火ランナー数:21人

※五十音順(敬称略)、走行日時点の満年齢

	<p>赤星 憲広(あかほし のりひろ)</p>	<p>43歳</p>	<p>刈谷市出身</p>
<p>東京2020オリンピックに聖火ランナーとして、携わることができるのであれば、大変光栄に思います。 幼少期から現在まで野球やスポーツに打ち込み向き合ってきた私にとって、また、スポーツを愛する者にとって、オリンピックは特別な大会の一つです。オリンピック経験者として、選手、応援する人、支える人、みんなの大会である東京2020オリンピックを、それぞれの形で肌心に感じ、それを未来へ繋げていって欲しいと強く思います。 その実現に向けて、私のスポーツ人生の原点である地元刈谷・愛知からオリンピックのシンボルである神聖な聖火に、みんなの想いに私の想いを込め、沿道で応援参加される皆さんに伝え、東京2020オリンピックへの関心と期待を呼び起こすとともに、皆さんの想いも聖火に受けてまた、その想いを繋げていくことで、聖火リレーと東京2020オリンピックを盛り上げる役目を果たしたいと考えております。</p>			
	<p>朝比奈 侑里香(あさひな ゆりか)</p>	<p>17歳</p>	<p>豊田市在住</p>
<p>希望の道をつなぐ。私は今、これに向かって高校生活を送っている。 私は先天性心疾患で生まれ、生後6日目と半年後に2回の大手術をした。当時は、将来激しい運動ができないかもしれないと医師に言われたが、小学校で走る楽しさを知り、陸上部で友と競い合う。今でも毎日の自宅トレーニングは欠かせない。努力の成果で中学の大会で目標だった個人優勝を達成、高校でも自己ベストを更新中。中学、高校とキャプテンを任せられ現在も勉強と陸上の両立に励んでいる。 将来の夢はお世話になった地元の大学病院で子供達に夢を与える仕事をする事。そして病気に負けず夢を持ち続ける事の大切さを教えたい。病気と闘っている子供達は十分頑張っている。言葉より私が聖火ランナーとして走っている姿を見せて夢と希望の炎を届けたい。諦めなければ夢は叶うという事を教えてあげたい。 これが私の夢であり希望の道。オリンピックの聖火という希望の象徴を子供達に絶対届けます。オリンピックイヤーが私の大学受験の年。夢に向かって必ず羽ばたきます。</p>			
	<p>天野 ひろゆき(あまの ひろゆき)</p>	<p>50歳</p>	<p>岡崎市出身</p>
<p>私は現在東京都に住んでいますが、今でも、生まれ育った愛知県岡崎市にはとても愛着があります。高校を卒業するまでを岡崎市で過ごしましたが、住んでいた当時は何もない街だと思っていました。しかし、地元を離れてみると、岡崎市には、城、花火、味噌、石材など多くの魅力的な日本文化があり、他にはない世界で唯一の街であると思うようになりました。この魅力をぜひ住んでいる方たちにも感じていただき、岡崎市に愛着と誇りをもって過ごしてほしいと思います。 聖火リレーはそのきっかけになる可能性があると考えます。コースとなっている岡崎公園は、徳川家康が誕生した岡崎城があり、岡崎公園の桜は、日本さくら名所100選に選ばれるなど全国的にも知名度が高いです。聖火リレーを通じてこの素晴らしい景観をより多くの市民に見ていただき、「岡崎に生まれてよかった」と思ってもらえるよう努めます。</p>			
	<p>伊藤 秋(いとう しゅう)</p>	<p>45歳</p>	<p>豊田市在住</p>
<p>現在の勤務先では、総務と人事の部長職を兼務しながら会社の設立した財団の評議員の任も受けています。県下所轄警察及び防犯協会などを通じ、豊田市や清須市、稲沢市や一宮市などの地域へ防犯カメラや侵入盗防止の補助錠を寄贈する、といった会社のCSR活動を主導する中で、地域活性化の重要性や有効性、特に「地域は人で出来ている」ことを肌で感じています。 現在はプライベートの時間も使い子ども食堂を訪ね、ボランティアの方々や子供たちとの交流を通して私自身が「支援のあり方」について勉強の日々です。 大学入学を機に三重県から愛知県に出て早や20年あまり、私自身も3児の父親となった今、自身の子どもは勿論ですが、子ども食堂で触れ合った子どもたちやボランティアの方々に対し、何かのかたちで心に残る感動を与えたいと考え応募いたします。</p>			

	岩城 ひろみ(いわき ひろみ)	50歳	刈谷市在住
<p>小学校の教師をしています。今回、5本の柱の中の街づくり、地域活性化、環境、というところを読んで、自分自身がこれまでやってきたことにピッタリ合うと思い応募しました。</p> <p>平成18年、地元の小垣江地区の緑水保全会からホタルを守る活動を呼びかけられ、「小垣江にもう一度ホタルを飛ばしたい!」という同じ願いのもと、小学校の子どもたちと一緒にこの活動に取り組みました。始めはホタルの飼育、保護活動が中心でしたが、地域の環境保全やホタル祭りの開催、高齢者施設との交流などが評価され、平成23年度に「こどもホタルエンジャー」(環境省主催)で環境大臣賞を受賞しました。</p> <p>また、「みどりの小道」環境日記コンクールにも子どもたちと取り組み、平成26年度から3年連続で環境大臣賞を受賞し、今も続けています。未来を担う子どもたち、地元でホタルが育つ環境を守り続けている人たちへの感謝の気持ちを伝えようと、チャレンジしました。みんなの思いも感じながら走りたいです。</p>			
 <p>Photo by Yuriko Imanaga</p>	宇野 昌磨(うの しょうま)	22歳	名古屋市出身
<p>5歳の時に初めて出会い、氷の上を音楽と共に滑る不思議な感覚と魅力からフィギュアスケートというスポーツに夢中になりました。</p> <p>両親は小さい頃から入退院を繰り返していた僕を、少しでも強く育つようにと多くのスポーツを経験させてくれました。アスリートとしては恵まれた体格ではありませんが、負けん気と努力と忍耐の能力は恵まれていた様に思います。身体の成長が遅く、上手い出来ない時期も長かったですが、それでも我慢と努力をポジティブに捉えて「必ずできる!」と思い続け、その成果が2018年平昌オリンピックで銀メダル獲得という結果に繋がったと思います。</p> <p>聖火ランナーとして走ることで、この思いを様々な夢に向かって頑張っている人達に伝えられればと思います。そして、これまで僕を支えてくれた家族、関係者、そしてファンの皆さまに、感謝の気持ちを伝えたいです。</p>			
	大石 康(おおいし やすし)	77歳	大府市在住
<p>1964年東京五輪の男子無差別級に出場した尊敬する大先輩の神永昭夫先生がオランダのヘーシング選手に敗れ涙した悔しさから少年柔道の指導者になり、1975年大府市で町道場を始めてから45年、基礎を重んじながら柔道界の底辺拡大に努めています。</p> <p><主な教え子></p> <p>バルセロナオリンピック 金メダル 吉田秀彦 アテネ、北京オリンピック 金メダル 谷本歩実 ロンドンオリンピック 5位 中井貴裕 リオオリンピック 銅メダル 近藤亜美</p> <p><主な受賞歴></p> <p>平成16年10月 大府スポーツ功労賞 平成21年 中日スポーツ功労賞 平成25年10月 文部科学大臣生涯スポーツ功労賞 平成28年9月 大府市スポーツ栄誉賞</p> <p>娘たちからの勧めもあり、少年柔道の指導者になることを決意した原点でもある東京オリンピック。聖火ランナーとして1964年の東京オリンピックから2020年東京オリンピックまでの思いを胸に走りたいと思います。</p>			
 <p>©San-En NeoPhoenix</p>	太田 敦也(おおた あつや)	35歳	豊川市在住
<p>幼少から抱いていたオリンピックに出場する!という夢を実現するために、自分が生まれ育った街のプロスポーツクラブ、三遠ネオフェニックスのバスケットボール選手となり、13年間バスケットボールとひたすら向き合ってきました。</p> <p>2011年から日本代表選手に選出されるようになり一歩ずつその夢への実現へ前に進んできました。今まさにそのチャンスが目の前にあり、ここまで育ててくださった恩師や友人、地域の皆さま、家族、そしてこれから大きな夢と志をもって挑戦していく地域の子どものためにも、死に物狂いでそのチャンスを掴み取りたいと考えております。そして、夢や目標に向かって努力することの大切さを伝えていきたいと思っています。</p> <p>また、4年に一度しかない世界最大のイベントであるオリンピックに、聖火ランナーとしても選手としても参加することができれば、大変栄誉あることであり、誇りに思います。選んでいただければ、自分にできることを精一杯努めたいと思います。</p>			

	太田 菜々恵(おおた ななえ)	12歳	豊田市在住
	大野 凌弥(おおの りょうや)	18歳	豊田市在住
	オカダ・カズチカ	32歳	安城市出身
	小池 光正(こいけ みつまさ)	70歳	日進市在住

「2008年4月1日以前生まれは参加できます」という発表は、私の心をはげしく強く動かしました。「私は、2008年1月生まれ。来年中学1年生だ」そして、母の妹が、中学1年生の時、全国で10人のアトランタオリンピック子ども特派員に選ばれたことを母から聞きました。さまざまな競技を取材し、生の感動体験の記事を書いたそうです。

私も、東京オリンピックに関わることがしたい。聖火ランナーに挑戦したい。聖火ランナー参加応募は自分自身へのチャレンジで、私が走ることによって足助を盛り上げ、元気にしていきたい。もっと足助を知ってもらい、もっと訪れてほしいという気持ちが強くわいてきました。

私は、今まで足助に関わるいろいろな活動をしてきました。春祭りでは、おはやしをやり、伝統芸能を守っています。足助の盆踊りの三味線や歌も今年から練習しています。そして、足助の名所である香嵐溪のモミジを残していくために、モミジを種から育てたり、植樹をしたりしました。足助を守り、魅力を発信して、愛知、日本、世界へとつなぐ活動をしていきたいです。

私は進行性の筋ジストロフィーという病気です。この病気は、筋肉がどんどんなくなり、近い将来、今、出来る事も少しずつできなくなり寝たきりもしくは“死”といつものとなり合わせにいます。

そんな今、夢中にさせているスポーツがあります。それはパラリンピック競技でもある「ボッチャ」です。ボッチャとの出会いは通っている支援学校。体育の授業で始めて僕にでも出来るスポーツでした。すごく興味深いスポーツで、技術、戦略、知能ととても難しいけどとても楽しい。

今までの僕ならば挑戦という言葉がとても苦手でしたが、今は違います。やらないで後悔するよりも、まずはやってみよう、何ごとにも挑戦してみようと思ひ、友人の誘いもあり聖火ランナーに車椅子ですが応募しました。よろしくお願ひします。

安城市は僕が生まれ育った故郷です。中学までをほぼ安城市で過ごし、現在も実家は変わらぬ場所にあります。学生時代の部活動では野球や陸上に励んでいました。そんな中に出会ったプロレスには非常に惹かれるものがあり、テレビ中継を観たり、会場に足を運んだり、中学生ながらに情報を集めていく中で、決心したことは「プロレスがやりたい。」

中学卒業後、単身、プロレス学校へ入門し、修行のためメキシコへ行きました。自分で決めて選んだ道とはいえ、練習メニューも環境も、かなり厳しいものでしたが、決してあきらめる気持ちにはなりません。それは、両親をはじめとする多くの方に支えてもらえたからだに感謝しています。「人事を尽くして天命を待つ」を自分の信条として、これまでプロレスに邁進してまいりました。

今回、安城市のオリンピック聖火ランナーを務めさせていただくことで、これまで応援してくださった故郷の子どもたちや市民の皆さんに、勇気と元気と笑顔が届けられるよう、精一杯走らせていただきたいと思います。

この応募に挑戦してみようと思ったのは、勤務先の病院の仲間たちに強く勧められたからです。その方たちいわく、私が聖火ランナーになれば、名古屋市・日進市・東郷町の私が診ている患者さんや地域の剣道クラブで教えている子供たちが大変喜ぶし、子供たちのオリンピックを待ち望む気持ちやスポーツ愛が益々向上するであろうと勧められたことがきっかけとなりました。

自己PRとはおこがましいのですが、私は地域の剣道クラブで二十数年間、子供たちに剣道の指導をしておりまして、2018年には、尾張東剣道連盟と日進剣道連盟の会長として愛知県と日進市の体育協会から功労賞を受賞しました。それとPRできることといえば、日進市の中核病院で内科医として診療する傍ら、愛知県の誇りであるトヨタ自動車工業株式会社の産業医に十六年ほど従事させていただき、地域の方々の予防医学にも貢献して参りました。ぜひとも来年の東京2020オリンピック聖火リレーのランナーの一人となって、地域の方々と一緒にオリンピックを盛り上げていきたいと思ひます。

	小久保 椎太(こくぼ しいた)	19歳	豊橋市在住
	<p>息子は重度の自閉症と知的障がいをもっており文章を書くことが苦手ですので父親が代筆します。豊橋というこの町で地域の皆さまのご理解と協力の中、地域の小中学校で学び成長することができ感謝しています。</p> <p>自閉症の障がいを持った方みんなが地域の中で幸せに暮らせる世界が私達の夢です。自閉症について多くの方に知ってもらうため、小さい頃から啓発活動を共に続けています。自閉症啓発の歌を彼が歌い動画をネット配信し、1万人以上の方に聞いてもらいました。この動画に数多くの反響いただき、世界自閉症啓発デーなどでも何度か紹介されました。これからも共に活動を続けていきたいと思っています。</p> <p>「ボクは元気な自閉っ子」紹介のホームページ、http://www.asahi-net.or.jp/~ku2t-kkb/autismsong.html</p> <p>自閉症啓発・自閉児応援ソング 「ボクは元気な自閉っ子」動画 https://youtu.be/60alfFLmy_o</p>		
	小寺 岸子(こてら きしこ)	53歳	武豊町在住
	<p>33年前、交通事故により車いすの生活になりました。その時は、「なぜ生き残ってしまったのか」という絶望しかありませんでした。その後、障害のある仲間を誘われて町に出かけることが楽しいリハビリになり、いつしか「楽しく生きよう」と思える自分がいました。</p> <p>その頃、町に出かける度に、車いすで自由に出かけられる場所が増えていると感じました。愛知県では「人にやさしい街づくり条例」の制定が街を変えていたのです。</p> <p>そこで当事者である私自身がこの流れを加速させるため、仲間とNPO法人ひとにやさしいまちづくりネットワーク・東海を立ち上げ「私が出会う人の数だけ、人がやさしくなる」と信じ、理解者を増やしてきました。</p> <p>NPO法人を設立して17年が経ち、これまでにバリアフリーマップの制作、小中学校での福祉教室、バリアフリーコンサートなど、多くの人と協力しながら、車いすでも楽しく暮らす企画をつくってきました。その感謝を伝えたいと思います。</p>		
	佐野 勇斗(さの はやと)	22歳	岡崎市出身
	<p>私は、聖火リレーを通して、地元である愛知県岡崎市の魅力を世界へ発信するとともに、岡崎市に住む方に「岡崎に生まれてよかった」と感じてもらえる機会にするよう努めます。私は現在、地元である岡崎市を離れて暮らしていますが、地元へ帰り、歴史と日本らしさを感じる岡崎の景観を見ると、いつも誇らしい気持ちになります。また岡崎を離れ、数年たった今でも、地元へ帰ると、家族や友人、地域の方がいつでも温かく迎えてくれます。</p> <p>聖火リレーでは、岡崎公園の桜と岡崎城を背景に聖火が繋がれていく様子を見ていただき、私と同じように、多くの市民の方に岡崎が持つ独自の景観を誇りに感じてほしいです。そして、多くの市民が慣れ親しんだ場所を、岡崎観光伝道師である私が走ることで、聖火リレーを市民の方が一体となって見られるイベントにし、見に来た方が岡崎の人が持つ温かさに触れられる機会にできればと思います。</p>		
	鈴木 明子(すずき あきこ)	35歳	豊橋市出身
	<p>私は豊橋市で生まれ育ち、6歳の時にフィギュアスケートを始めました。大学卒業後は、名古屋市リンクを練習拠点として活動してきました。10代後半には摂食障害を患い、医師から「トップレベルでの競技復帰は不可能」と言われるほど体調を崩して、試合にも出られない、とても苦しい時期を経験しました。でも、周りの人に支えられながら、決して諦めないという強い気持ちをもって1年で復帰することができ、2012年の世界選手権での銅メダル獲得、2010年バンクーバー五輪、2014年ソチ五輪での入賞へとつながることができました。</p> <p>私が聖火ランナーとして走ることで、大きな困難に直面しても、諦めずに頑張れば必ず克服できるということを、将来の夢に向かって頑張る子どもたちを始め、様々なことに挑戦している方々に伝えたいです。そして、これまで私を応援し、支えてくださった地元愛知・豊橋の皆さん、全国の皆さんに、感謝の気持ちを伝えたいです。</p>		

	豊田 彬子(とよだ あきこ)	73歳	豊田市在住
<p>豊田市には人口の約4.5パーセントに当たる約18,500人の外国人が住んでいます。国籍でいうと日本を含めて約75ヶ国の人たちが豊田市民であるわけです。豊田市国際交流協会は、言葉が違って、文化や習慣が違って、そんな多種多様な人たちがお互いの違いを認め合い、尊敬しあうことのできる温かく心の通い合う町、誰もが快適に暮らせる笑顔あふれる町を目指して日々努力しています。</p> <p>例えば、気軽に日本語が学べる場をつくったり、お互いの文化を紹介する機会をつくったり、通訳や相談にのったりなど様々な工夫をしながら、外国人や多くのボランティアと共に知恵を絞りながら多文化共生に取り組んでいます。地道で本当にささやかな活動ですが、一緒に日々頑張っている人たちの思いを聖火に込めて次へつないでいけたらと願って応募しました。</p>			
	原 由希恵(はら ゆきえ)	49歳	東浦町在住
<p>私は地元である東浦町で2010年から日本語教室でボランティア活動をしています。教室の名前は「にほんごひろば」といい、東浦町に住む日本人と外国人が日本語を通じてあつまる「ひろば」のような存在になるようにと願いが込められています。</p> <p>私たちの教室は日本語の勉強だけでなく、同じ東浦に住む住人同士・友達として生活上の相談や情報交換、交流活動を行っており、私は2018年からにほんごひろばの代表として活動をしています。</p> <p>外国人の方がにほんごひろばに集まり、楽しく日本語の勉強や交流したりしている姿を見たり、何年も継続して教室にきてくださることが一番のやりがいです。今回も教室と一緒に日本語を勉強している外国人の方と一緒に聖火ランナーの応募をして、来年のオリンピックの話題で教室が盛り上がっています。ぜひとも、私や仲間が聖火ランナーとしてオリンピックに参加し「多文化共生」の大切さと楽しさを伝えたいです。</p>			
	平野 泰新(ひらの たいしん)	25歳	半田市出身
<p>私は、半田市で生まれ育ちました。高校時代は半田市を離れることになりましたが、現在は半田市へ戻り、タレント「MAG!C☆PRINCE」として活動しています。平成31年4月に半田市長から「半田市PR大使」として任命を受け、テレビ出演や日常生活を通じて、多くの方にまちの魅力を伝えられるようPR活動に奮闘しているところです。</p> <p>私は高校時代、青森山田高校で男子新体操部のキャプテンを務め、全国高等学校総合体育大会で優勝することができました。新体操の団体競技での統一感溢れるダイナミックな演技は、個人ひとり一人の努力が調和することにより得られるものだと思います。オリンピズムの目的である「人間の尊厳保持に重きを置いた平和な社会の推進」も、ひとり一人が努力し、意識しなければ実現できません。</p> <p>ぜひともこのオリンピズムを象徴する聖火リレーに参加し、オリンピック・ムーブメントの推進に少しでも貢献させていただきたいと考えています。</p>			
	松井 玲奈(まつい れな)	28歳	豊橋市出身
<p>全世界が注目する東京2020オリンピック大会開催まで1年をきり、出場選手決定の報道も流れる中、オリンピックのシンボルであるオリンピック聖火が56年振りに地元豊橋市を通過するとのニュースを聞き、是非豊橋でランナーをやりたいと思いました。</p> <p>地元のPR・知名度向上につながればと「豊橋ふるさと大使」や「豊橋カレーうどん大使」、「ええじゃないか」とよはし映画祭アンバサダー」に就任し、活動させていただいております。この聖火リレーが皆様の記憶に残り、子どもたちに夢や希望を与えられるものとなるようにしっかり盛り上げていきたいと思っています。</p> <p>さらに、今回の東京2020オリンピックは復興五輪とも言われ、聖火リレーも2020年春放送予定の連続テレビ小説「エール」で豊橋と繋がっている福島から始まります。自分がランナーを務めることで誰かの希望となり、応援をいただいている方々への恩返しになればと思います。</p>			

ルハグワドルジ・ナンデンエルデネ

28歳

岡崎市在住



私が聖火ランナーに応募する理由は、私が日本に来るチャンスを与えてくれた人たちに感謝の気持ちを伝えるためです。

私は技能実習生として2014年来日し、約3年間の実習をしました。その3年間は、技能の習得だけでなく、私にとって良い人生経験にもなりました。中でも、私が実習している間に法律が変わり、2年延長できることになったとき、私はもっと日本で学びたいと思いました。私が実習期間を延長したいと伝えたとき、快く承諾してくれて、さらに随時3級試験に合格するためにいろいろ教えてくれた会社の人たちにはとても感謝しています。

私は2018年に再び技能実習生として日本に戻ってきました。このチャンスを与えてくれた会社の皆さん、監理団体の皆さん、そしてモンゴルにいる家族のみんなに、聖火ランナーとして走ることで国をつなぐかけはしとなる姿を見せたいと思います。